

# Leaves of Grass における「自然」の周辺

稲 垣 春 男\*

In and Around Whitman's Nature in *Leaves of Grass*

Haruo INAGAKI

## 要 旨

民族の詩人、人類の詩人としての壮大なスケールを保持して、その一生を詩作に託したホイットマンは、彼の詩の主題の方面から見れば、「靈魂」の詩人、「自然」の詩人としての姿を明示してくれる。

本編では、「人間」に對置された「自然」には非ずして、人間の靈魂に従属、同化し、手を携えて無限の前進を続ける「自然」の意味を、*Leaves of Grass*（「草の葉」）を中心に究明したい。

## Synopsis

We know that Whitman dedicated his whole life to establish the poetic world of *Leaves of Grass*, always maintaining that gigantic scale only shown by such a racial poet, a poet of mankind, as he. Now, when we take notice of the poetic characters of the themes he handled, we are quite sure that he is the real poet of both Soul and Nature.

In this work, I want to clarify the meaning of his Nature, which is not set in contraposition to the human society, but is dependent to the human Soul and assimilated with it and, continue together, their endless procession hand in hand.

## 目 次

|            |                 |           |  |  |  |
|------------|-----------------|-----------|--|--|--|
| I 自然と自然賛美  |                 |           |  |  |  |
| (1) 詩のフォーム | (2) ホイットマンの楽天主義 |           |  |  |  |
| II 自然と人間   |                 |           |  |  |  |
| (1) 自然と社会  | (2) 自然と性        |           |  |  |  |
| III 自然と闘争  |                 |           |  |  |  |
| (1) 限りなき前進 | (2) 自然と靈魂       | (3) 自然と生死 |  |  |  |
| IV 自然と宗教   |                 |           |  |  |  |
| (1) 愛と民主主義 | (2) 宇宙的調和・団結    |           |  |  |  |

× × × × × ×

## I. 自然と自然賛美

大きくなった黄色の半月が海面に触ればかりに沈みゆくとき、波に裸足<sup>はだし</sup>を、大氣に髪をなぶらせていた少年の彼は恍惚感に震えた。……

The yellow half-moon enlarged, sagging down, drooping, the face  
of the sea almost touching,

The boy ecstatic, with his bare feet the waves, with his hair the  
atmosphere dallying,<sup>1)</sup>

.....

\* 教授 一般教科

マンハッタンに住人であり、宇宙の子であり、自然詩人であったホイットマン！彼の生涯の成果、稀に見る大作、「草の葉」を味読するとき、我々はその都度、彼の民族詩人としての、人類詩人としての真摯な魂に、また無限の良心に脱帽せざるを得ない。

彼の歌う「自然」は汎神論的な、また密教的な意味をもっている。初めは粗野で、不可知なりと思われた大自然の中に、言葉では尽せぬ美しさをもった神聖なるものが包み込まれているという自覚である。彼の「自然」の宣揚、賛美は、自分自身が自然界の「事物の極点」(an acme of things)であるという人間と自然との一体感の発露に外ならない。

彼が示した思念の壮大なスケール、ひたぶるな前進の気魄は、瞬時の狐疑逡巡もなく、全詩篇に、否彼の全生涯に徹底している。彼は途轍もない人生肯定の詩人であり、その自然賛美も裏を返せば人間賛美に外ならない。

水に照り映える夏の空、そこに見える詩人の頭から遠心的に放射される光の幅、南に霞む藍色の丘、そして彼を浸しつむ金色の霞、……。だが、自然の幽玄を求めて遁世するという生き方は、この詩人には見られない。彼は遠く未来の人間にまでも、時空を超えて、喜び一杯に話しかけてくる。すなわち、自然と人事を両車輪にして進むという趣である。

話すに必要な呼吸を可能にする大気、我が意図に形を与えてくれる事象、我を、そして万物をつつみ、一様に降りそそぐ光、……。彼はそれらの賛美者である。その顔色は常に爽快、逞しい野人である。文明を謳歌する野蛮人である。19世紀に住んだ原始人である。

#### (1) 詩のフォーム

新しいアメリカの風土の中で、現代文明と民主主義を歌うホイットマン！現代と未来の光輝のために、旧世界 (Old-World) の伝説、神話、ロマンスの常套の主題を放棄した彼は、必然的に婉曲語法 (euphemism) や押韻 (rhym) を省りみることはしなかった。新しい形式、新しい表現、新しい詩の登場である。

Proud Music of the Storm (嵐の誇らかな音楽) の詩では、Floyd Stovall が指摘しているように、<sup>2)</sup>彼の意図する新しき詩とは、人間の芸術と自然の芸術とを溶融するものであることが歌われている。

彼のこの新しき詩のリズムは、諸国民の言語に自然のリズムが混交したものである。東洋の宗教舞踊のリズム、河の響動めき、瀑布の咆哮、そして遠方の砲声、騎兵隊の疾駆する物音の混在である。完全な詩のフォームは動物や樹木のように、宇宙全体の計画に調和して成長し、自然と一致符合 (tally nature) するものである。

And for their solvent setting earth's own diapason,  
Of winds and woods and mighty ocean waves,

(ll. 45, 6)

(そして彼等の溶媒として、大地自らの協和音を用いる。

風の、森林の、そして力強い大海の波の音を。)

また、彼は歌う。

I think heroic deeds were all conceiv'd in the open air, and all  
free poems also,<sup>3)</sup>

(私は思う、英雄的行為はみんな戸外の空気の中で考えられたものだし、またすべての  
自由詩にしてもそうなのだ。)

人間界の処世の雑音、声楽家の妙なる歌唱に、自然界の音響がミックスされるのである。

「草の葉」所収の402を数える詩群を見ても、1346行の Song of Myself (私自身の歌)、335行の By Blue Ontario's Shore (青きオンタリオの岸にて) の長詩があるかと思うと、By the Roadside (路傍にて) 篇には、Thought (思い) と To Old Age (古き時代に) の1行の短詩があるというように、<sup>4)</sup>長さにおいても減法に多彩である。

彼の詩の表現において、特色の一つとして考えられる所謂「カタログ的性格」(descriptive catalogues) にしても、その内容の前後関係や調子を洞察するとき、まことに絶妙、完璧の自然性を発揮している。簡潔性、迫真性、力動感、ともに此上もないものとなっている。一行、一行の配置自体が詩となっている。

彼がポー・マノックの砂浜で耳を傾けた波の音にしても、時に新た、日に新たであって、劃一の韻律のヒントを与えるものではなかったであろう。<sup>オーストラリア</sup>伝統的な押韻の見られる O Captain! My Captain! は、かえってそれ程に好評ではない。むしろ、かかる押韻の詩が生じたことそれ自体が、リンカンの光栄ある死に敬意を表した詩人の、巧まざる「自然」であったと解釈したい。

語句の繰り返しの妙も素晴らしい。パラ、パラと *Leaves of Grass* の頁をめくって、たとえば、Prayer of Columbus (コロンブスの祈り) の詩を見ても、Thou knowest~ の行頭における6回の繰り返しの後に By me~ の繰り返しが3回、何行かのとびが見られるが、Haply~ が3回、My~ が3回、And~ が3回繰り返されると言った調子である。<sup>5)</sup> これらの反復は、詩中で見ると、決して鼻につくようなものではなく、その出現箇所、頻度数は、全体の自然なリズム感に一体化している。いわば、高山の鉄道で、重畳する岩石の起伏を眺めつつ、駆け上り、駆け下る趣であって、息もつかせない感激である。

筆者は意識的に、ホイットマンが彼の詩の一行の中で、同一語句を3回以上繰り返している箇所を調べてみた。彼の強調しているフィーリング、イメージといったものを捉えてみたかったからである。そしてそれらの語句の絶妙の布陣にすっかり感心した訳である。全く不自然なところがないということである。用いられている語句にも、偏りや煩雑さが見られない。例えば、love の語を繰り返すにしても、単純に love, love, love と繰り返すような例は少なく、<sup>6)</sup> また次に、1行に2回繰り返す場合であるが、例として記した with love の強調にしても、いわばこの Out of the Cradle Endlessly Rocking の詩のみのものであり、他の詩の中にも再度出てくるというケースは稀である。

*Low hangs the moon, it rose late,  
It is lagging—O I think it is heavy with love, with love.*

*O madly the sea pushes upon the land,  
With love, with love.*

(ll. 75-78) (下線は筆者)

(月が低く空にかかっている。遅れて昇ってきたのだ。

のろのろとした月だ。愛を秘めて、愛を秘めているから、重たいのだ。

おお、海が狂おしげに陸地に打ち寄せる。

愛を秘めて、愛を秘めて。)

Sands at Seventy (古稀の流砂) 篇の Had I the Choice (選択が許されるならば) の詩の、第6行の例、

*These, these, O sea, all these I'd gladly barter,*

(下線は筆者)

(これらを、これらを、おお海よ、これらの一切を私は喜んで交換したい。)

ここでは、ホーマー、シェイクスピア、テニスンらの巨匠の詩作に見られる表現力、その完璧な韻律でさえも、一つの波のうねり、その息吹きとなら喜んで交換しようと申し出ているのである。人工の精緻を捨てて、自然の無法の法に就こうとする彼の意図、作詩態度が、これら these の3回の繰り返しで実に良く強調されていると思われる。

Thou Mother with Thy Equal Brood<sup>7)</sup> (汝の平等なる雛たちと共にいる母鳥よ) の第45行の例、

*Thou but the apples, long, long, long a-growing,*

(下線は筆者)

(汝、長き、長き、長き年月、林檎の実を育てつつ、)

珍しく、long の単純な繰り返しの形である。綿綿と綴られている人類の歴史、偉大な足跡、……。汝、新大陸 (the New World) は、長いこと栽培されてきた林檎の実 (人類の文化遺産のシンボル) を継承するのである。

さらに、これに似た一例として、Passage to India<sup>8)</sup> (インドへの航路) の第9行を追加する。

*The Past! the Past! the Past!*

1866年の大西洋海底電線、1869年のスエズ運河とアメリカ大陸横断鉄道の完成をみて、中世以来の世界結

合の夢 (the medieval dream of world unity) が果された今日、永生の海、神の海 (the seas of God) は、人間の靈魂 (soul) と共に、無限の過去の偉大な事跡を回想してかく叫ぶのである。過去2世紀に播かれた種子とその成長、そしてその結実である19世紀を生きていった詩人の叫びである。

これらの同一語句の反復は、行頭の場合もふくめて、(注)の(5)、(6)で述べたように、こうして列挙しているとは食傷気味となるが、実際に詩の中で読むと全く左に非ずである。この点、岸に打ちつける波の音は、晴れた日、曇りの日、荒れた海、風いだ海、夕の浜、暁の浜と何回繰り返して聞いても飽きることがないのに似ている。眼下に満ちる汐、西空の雲、そこに沈まんとする夕日の美しさが日に日に新しいのと同趣である。抑止されない自然、その本来のエネルギーを歌い上げる自然詩人の工夫である。それらは、クロバーやチモシーを掴んで乾し草の中に転がりまわった詩人の健全自由な個性が、ロング・アイランド (Long Island) の草地に仰臥しながら接触した大気 (atmosphere) のようである。浄化されていて嫌味がない。

## (2) ホイットマンの楽天主義

ホイットマンの楽天主義 (optimist) であることは、夙に喧伝している。「草の葉」の詞藻の中に、楽天主義が窺われるものを取り上げることにして、彼が好んで使用している“joy”の一語に視点をおいてみる。

早速、思い浮ぶのは、靈魂の船が現世の岸 (死のシンボル) を離れて、永遠の生命である大海に出航する歓喜を叫ぶ“Joy, Shipmate, Joy!”<sup>9)</sup> (喜べ、乗組員よ、喜べ!) の詩である。

この「喜び」は、明らかに「生」と「死」の一如たることへの悟入から発するものである。雲が星を隠すのは一時であるように、死が靈魂の不死の性格を危く見せるのも一時に過ぎないという悟りである。

Of Him I Love Day and Night (日夜愛している彼のこと) の第12, 13の、末尾の行では、この靈魂の詩は次のように自得している。

And if the corpse of anyone I love, or if my own corpse, be  
duly render'd to powder and pour'd in the sea, I shall be  
satisfied,

Or if it be distributed to the winds I shall be satisfied.<sup>10)</sup>

死体は、愛する者のものであろうと、自分のものであろうと、灰にして、後は海に流そうと、風の吹くに任せようと結構だという自在の心境である。

「放浪の人」(loafer) と自称し、人からも然く見られた彼ではあるが、苦難を回避しようとする意図は毛頭なく、むしろ積極的にそれらを甘受しようとする態度が見られる。南北戦争当時、20か月にわたって看護人として日夜献身的努力をはらった事実は、雄弁にこれを物語っている。

Sea-Drift (藻汐草) 篇の Tears<sup>11)</sup> (涙) という詩では、第1行の Tears! tears! tears! と、第13行の Of tears! tears! tears! と、ホイットマンとしても珍しく、同一詩中に同じ語の3回の繰り返しを2か所で使用しているが、死を前にした人間生活の癒しがたい苦悶が詩人自らの体験として如実に描かれている。彼の楽天主義が努力と涙なしで貫かれるものではないことを示す好例であろう。

1874年の6月17日、マサチューセッツ州のタフツ・カレッジ (Tufts College) の卒業式にはなむけられた Song of the Universal<sup>12)</sup> (普遍者の歌) では、健康と共に「喜び」が顔を見せている。

Health to emerge and joy, joy universal.

(l. 24) (下線は筆者)

すべてを包み、祝福する「愛」と「自然」。普遍的な健康、平和、救済、それらが実現されない世界なら、それ自体が夢であると断言するホイットマン! 楽天主義も極まれりと言えよう。

The Mystic Trumpeter<sup>13)</sup> (神秘のトランペット吹奏者) の最終第8節の頁を開くと、第68, 69, 70行と3行が連続して all joy! で終わっており、<sup>14)</sup> まことに印象的である。もっともこの第8節では、一部を下に記すが、その後半の9行 (ll. 68-76) の中で joy が13回繰り返されるのである。

The ocean fill'd with joy—the atmosphere all joy!  
Joy! joy! in freedom, worship, love! joy in the ecstasy of life!  
Enough to merely be! enough to breathe!  
Joy! joy! all over joy.<sup>15)</sup>

(ll. 73-6) (下線は筆者)

(喜びに満ちた大洋——大気に溢れる喜び！

喜び！ 喜び！ 自由と、礼拝と、愛のうちに！ 法悦の生活をおくる喜び！

生きていることで十分だ！ 呼吸をしているそのことだけで十分だ！

喜び！ 喜び！ 一切に溢れる喜びだ！)

これらの躍動的な“joy”の反復と、感嘆符の林立！ この一篇の詩だけでも、ホイットマンに「楽天的詩人」、「太陽の詩人」というレッテルを貼るのに十分かと思われる。

繰り返し、彼の楽天主義の秘密を解明するために、Drum-Taps (軍鼓の響き) 篇の The Wound-Dresser (看護者) の詩中の一行を引用する。

(Both I remember well—many the hardships, few the joys, yet I  
was content.)<sup>16)</sup>

烈しい突撃、鮮血に染む草、大地。看護者の体験は喜び少なく、悲しいものであった。苦難を耐え忍ぶところに生まれる満足感——ここに彼の「楽天」の扉を開く鍵がある。

「私の舌も、血液の各原子も、土壌から、空気から形成されているのだ。」<sup>17)</sup> というこの自然詩人は、「自然」をして、抑止されない本来のエネルギーをもつてのびのびと語らせる。大地を賛美し、親しく海に呼び掛ける。

Smile O voluptuous cool-breath'd earth!  
Earth of the slumbering and liquid trees!  
Earth of departed sunset—earth of the mountains misty-topt!  
Earth of the vitreous pour of the full moon just tinged with blue!  
Earth of shine and dark mottling the tide of the river!  
Earth of the limpid gray of clouds brighter and clearer for my  
sake!  
Far-swooping elbow'd earth—rich apple-blossom'd earth!  
Smile, for your lover comes.<sup>18)</sup>

(微笑んでくれ、おお、官能的な、清しい氣息の大地よ！

まどろむような、みずみずしい樹木が茂る大地よ！

去り行く落日の大地——頂を霧に包まれた山並の大地よ！

満月の注ぐ澄んだ光につつまれて、青味を帯びた大地よ！

河の流れを明暗の斑に染めぬいた大地よ！

静かな灰色の雲を浮べ、私のためにより輝いて、より清らかに見える大地よ！

遙かにグッと肘を張り出し、林檎の花も豊かに咲き満ちている大地よ！

微笑んでくれ、お前を愛する者が来たのだよ！)

You sea! I resign myself to you also—I guess what you mean,  
I behold from the beach your crooked inviting fingers,  
I believe you refuse to go back without feeling of me,  
We must have a turn together, I undress, hurry me out of sight of  
the land,

Cushion me soft, rock me in billowy drowse,  
Dash me with amorous wet, I can repay you.<sup>19)</sup>

(お前、海よ！ 私はお前にも私を委ねる——お前の気心は察しがつくのだ。

私は渚から、お前が指をまげて私を呼んでいるのを眺める。

お前は私の私に触れることなしに戻りはすまいと信じている。

共に一旋回しようじゃないか。私は衣服を脱ぎ捨てる。急いで陸地の見えぬところへ運んでくれよ。

柔らかく私を載せ、眠りを誘う波のうねりで揺ってくれよ。

愛情のこもった飛沫をかけてくれ。私はお前の愛にこたえられるのだよ。)

ホイットマンが考えていた、幸福 (happiness) の発見と実現のための最善の方法は、Democratic Vistas

(民主主義展望)で述べられているように、<sup>20)</sup> 情緒的にも、審美的にも、はたまた宗教的にも、専ら自然の精神 (the spirit of Nature) を中心にして考えられるものであった。したがって、調和、活動、発展性を伴った室内の生活に劣らず、正常な条件をそなえた戸外の生活を重視すべきことが強調される。彼の法悦 (ecstasy) の境地は、財産や娯楽を乗り越え、知性や学識や芸術的感覚の満足よりも、空、空気、水、樹木といった無数の自然事象との関係、日夜我々を包む自然界の「万有」(Being) との健全な接触のうちに生まれるものである。

×      ×      ×      ×      ×      ×

## II. 自然と人間

「草の葉」を通読していつも感ぜられることは、自然と人間の諸現象が互いに密着し、経糸と緯糸のように、断絶感なく織りなされている素晴らしさである。もっとも、彼によれば、民族や人類の代表者たりうるような真の詩人とは、人間と自然の合一性 (unity) を完全に知覚しうる詩人に外ならない。

ホイットマンの描く自然はかなり生臭い。人間臭が芬々としている。いわば女精のように美しく、酒神のように乱飲乱舞する。この自然は、我々のすぐ身近かに親しみ深い対象としてあり、一線を劃した厳肅性や畏怖の念を要求することはない。その意味ではギリシア的自然である。

洗熊 (coon) を求めて、レッド河や、テネシー、アーカンソー州の河川の流域を探る人々の姿は、芭蕉の「木のもとに汁も鱈も桜かな」<sup>なまぐす</sup>、「俳や媛ひとりなく月の友」の句を連想させる。自然の背景から浮び出る庶民の哀歎である。「寂」<sup>さび</sup>の心とともに「軽み」<sup>かろみ</sup>が説かれ、人間と自然が到るところで交錯し、融合する。ホイットマン一流の弁証法的な展開である。

Preface to 1855 Edition of “Leaves of Grass” (「草の葉」の1855年版の序文)では、詩人たるものの意図や役割がいろいろと説かれている。自分の詩についての議論や批評には全く関与しないことを述べるとともに、詩の主題にふれて、陸や海、動物、魚、鳥、空、天体、山林、河川の大事であることを説き、加えて、これら自然の諸実在と人間の靈魂の間をつなぐ道を示すことが必要であると云っている。特に、戸外の人間、それも狩人、樵夫、早起き者、園丁、農耕夫、愛情豊かで健康な女性、船乗り、騎乗者達を裏切るこなき美の供給者、詩的世界の住人として挙げている。<sup>21)</sup>

### (1) 自然と社会

不滅なるもの、美しき諸特質、国家といった主題にさがけて彼の描く標準的な自然は、矢張りアメリカ大陸のそれであり、広大な大自然である。またそこに登場する人間達も、抱負と活気に満ち溢れた新世界 (New World) の開拓者たちである。

世相の推移を浮藻のそれと果無み、大自然の懷に隠棲すると云うような逃避性は、この詩人の資質には皆無である。科学の進歩の著しい現在、そして末来こそが、「自然」を、されば彼の詩を必要とするのである。彼が自然を賛美し、憧憬するのは、常に健康な男女を、白日の下で蝕まれざる人間美を宇宙の中心主題として称揚せんがために外ならない。

宇宙の神秘のシンボルである「草の葉」の意図を解明する鍵は、山中の一匹の虹<sup>あぶ</sup>の羽音に、また、海岸に打寄せる波の一揺れ、その一雫にもひそんでいる。また、その意図を支持する言葉は、造船工の大槌に、ボート漕手のオールに、また大工の手鋸の中に見出される。豆莢の中の豆粒を一見するだけでも、人類が形成し、伝承して来た学問体系を揺るがすに十分なのである。

And there is no object so soft but it makes a hub for the wheel'd  
universe,<sup>22)</sup>

(また、どんなに柔らかな物でも、宇宙の大車輪<sup>こしき</sup>の轂となり得ないものはない。)

Out of the Cradle Endlessly Rocking の詩の中で、物真似鳥が魔神 (Demon) のように叫ぶ悲痛の歌を聞いて、少年の彼が悟りをえたという不死の詩人の使命感は、実に、自然のこの囁き、叫びに耳を澄ませ、自然の思惑の境に没入することであった。そこに発見される自然の意図を翻訳し、人類に説き明かすような

詩を書くことであった。

Is it indeed toward your mate you sing? or is it really to me?  
For I, that was a child, my tongue's use sleeping, now I have  
heard you,  
Now in a moment I know what I am for, I awake,  
And already a thousand singers, a thousand songs, clearer, louder  
and more sorrowful than yours,  
A thousand warbling echoes have started to life within me, never  
to die.<sup>23)</sup>

(お前が歌っているのは、まことお前の連れの鶇鳥に向かってなのか、それとも本当は私に對してなのか。

何となれば、子供であった私、舌の動きも眠っていた私、それが今こうしてお前の歌を聴いていると、

この一刹那、たちまち自分の生命の目的を知り、自らに目覚めたからだ。

それで、もう、一千人の歌い手が、一千の歌が、お前のよりももっとはっきりと大きく、さらに悲しげに、

一千の囀りのこだまが、私のうちに息衝きはじめてのた。決して死に絶えることなく。)

高山樗牛も、その「ワルト、ホイットマンを論ず」の文中で、「春来れば花咲き、秋来れば霜降り、日は常に東西し、月は永く盈虧す。」と大自然の真理に触れ、装い、飾り、欺き、偽る人々に、その偽りを捨てるようにと、次のように説いている。

「實在の人生は決して自然に離れ得べきものにあらず、是れホイットマンが人生に關して有せる根本の思想なり。げに文明とは自然の制御の謂なるべし、されど然るが故に自然を輕蔑し、其要求を卑むべき理は何処にある。」<sup>24)</sup>

そして、樗牛は Song of Myself の詩行を引用しながら、「時弊の救済者」としてのホイットマンを賛えて結びとしている。

「今は是れ彼の知らるべき時にはあらざるか。何となれば、彼の知らるる時はやがて偽りの世の終りを告ぐべき時なればなり。吾等豈詩歌を以て殊に言を為さむや。」

まことに、1970年代の我々もまた、この「偽りの世」の決して無縁にあらざることを、いな、その暗澹たる汚濁の世の弊害が却って甚だ近く急なることを知るのである。

## (2) 自然と性

A Backward Glance O'er Travel'd Roads (過ぎ来し方を回顧して) をはじめとして、Children of Adam (アダムの子等) 篇の各詩は、人間性 (Personality) を主題として取り上げる。そして嘗ていかなる詩人や著者も試みなかった卒直さで包括的な解明を試みている。それらは、情緒的、倫理的、そして審美的な観点からとらえられた自己とともに、肉体的 (physical) で性的な人間性についても明白に、且健全に歌い上げている。

ホイットマンが理解する性本能とは、人間、自然それぞれの創造力であり、前進する力に外ならない。Stovall が指摘しているように、<sup>25)</sup> この本能は物象界、精神界の双方に見られるのである。それは、いわば交響楽の音部記号 (clef) であり、靈魂と肉体の全一性 (entirety) を浸透させる原動力である。つまり、性は「自然の性」としての健全性をもつことが、その存在理由なのである。

イヴ (Eve) を伴う私は、現在に満足し、過去に満足するとともに外界を観察し、精神界に進出し、同化しながら世界の楽園に登場する。<sup>26)</sup> この Children of Adam 篇の他の詩、Native Moments (天然の折々) でも示されているように、性の対象として日夜つり合わされべきものは、「自然」の愛し子達でなければならない。

To-day I go consort with Nature's darlings, to-night too,<sup>27)</sup>

この健全なる性は、健全なる男性、そして特に、健全なる「母性」と表裏一体となる。ここに示される

のは、親愛と尊敬の対象である、彼自身をも産み育てた「神々しき一切のものの混成たる母性」(the divine blending, maternity) であり、「アメリカに相応しい母親だち」(The mothers fit for thee (=America 筆者))<sup>28)</sup> である。

さればこそ、この Adam 篇の中の幾つかの詩群についてエマソンが試みた厳しい削除の忠告も、自然詩人の信念に逆説的教訓を与えるにとどまったのである。また、ボストン地方検事局が、猥褻文学の故をもって行なった州内での発売禁止という処分にも断乎ひるまなかつた理由が明々白々となってくる。そこには、彼、ホイットマンの、満ち汐の満ちる力にも劣らない堂々たる意欲と、日輪の光芒の如き必然性の証が感ぜられる。

Adam の詩篇は Calamus (カラムス) の詩篇と手を携え、異性の愛 (Amativeness) は僚友の愛 (Adhesiveness) とともに車の両輪となって進むのである。それは、後にも触れる「愛」の問題の現実的な証明となり、同時に、「靈魂」の前進に関しては中枢的役割を荷うものである。

この Adam 篇には、西方の海の果てに、インド (Hindustan) を、アジアを、さらには、神を、「母性の館」(house of maternity) を探し求めて船出することを歌った、Facing West from California's Shores (カリフォルニアの岸辺より西方に向かって) の詩が見られる。この詩を組み入れたホイットマンの意図こそ、既述のように、自然が性本能 (instinct of sex) を所有する確信によるのである。

こうして見ると、「自然」(Nature) も、山川草木の「自然」、そして文化・文明・人工に対置される「自然」、さらには自然主義にも連関する、性欲や肉体的衝動などと密接した、健康で本能的な「自然」の諸相が考えられる。ホイットマンの場合には、これらがすべて霊肉一致の境地で考えられる。

*Preface 1876—Leaves of Grass and Two Rivulets* でも述べられているように、「草の葉」の真髄は、全篇にくまなくみられる精神であることが希望されるが、詩の対象から生ずる直接の効果は生命の感覚であり、血肉であり、肉体的衝動であり、動物的本能なのである。<sup>29)</sup>

自然と文明は、それぞれの前進の流れのうちに混然一体化される。そして、その進路の彼方には、「神聖な森羅万象の法則」(the law of the universal) の麗光が常に望まれるのである。

×       ×       ×       ×       ×       ×

### III. 自然と闘争

自由の要素である精霊 (soul) と自然法則の要素である精霊との間には永遠の闘争が見られる。この闘争を大洋の潮流と、悲嘆に沈む海の騒乱に象徴したのが With Husky-Haughty Lips, O Sea! (しわがれて、尊大な唇をもった、おお海よ!) の詩である。自然の偉大性はこの闘争をとおして成長する。

The first and last confession of the globe,  
Outsurging, muttering from the soul's abysms,  
The tale of cosmic elemental passion,  
Thou tellest to a kindred soul.<sup>30)</sup>

(最初にして最後の地球の告白、

魂の深き淵より波立ち、つぶやきながら、

宇宙の本質をなす激情の物語を、

お前は自分に似通った魂に語り聞かせる。)

時間と空間の広大な領域に橋をかけ、人類の幾世代にもわたる進化と累層的な成長の跡付と予言を試みた彼は、南北戦争をとおして得た戦争の現地体験の重要性については、十分過ぎる程自覚していたことがわかる。また、彼の生涯かけての詩作の努力自体が、前進的闘争の歴史であったと言える。

Begun in ripen'd youth and steadily pursued,  
Wandering, peering, dallying with all — war, peace, day and  
night absorbing,  
Never even for one brief hour abandoning my task,

I end it here in sickness, poverty, and old age.<sup>31)</sup>

(L. of G.'s Purport, ll. 6-9)

(成熟の青春に始まり、着実に追求しつつ、  
彷徨し、観察し、一切のものになじみながら——戦争に、平和に、  
日夜吸収しつつ、  
たとえ瞬時たりとも自分の仕事を休まなかった私は、  
今、それを病床と貧苦と老齢の中に終了する。)

#### (1) 限りなき前進

今日と今日以後を結合する詩人、ホイットマン、の詩には一貫して限りなき前進への呼びかけが見られる。それは潮の流れにも似た前進である。人間活動の原動力がそこから発する「靈魂」(soul)は、時間と空間を超越する不滅の前進に裏書きされるものだからである。現在が常に「発端」(inception)であり、青春であり、完成のチャンスであるとする自覚である。時間の推移は人間と自然の接点としてとらえられる。

Pioneers! O Pioneers! (開拓者よ! おお、開拓者よ!) は、開拓者魂に託して、敗北にもひるまぬ、戦いと休みなき前進を促す詩である。

Till with sound of trumpet,  
Far, far off the daybreak call—hark! how loud and clear I hear  
it wind,  
Swift! to the head of the army!—swift! spring to your places,  
Pioneers! O pioneers!<sup>32)</sup>

(トランペットが鳴る時までだ。  
ほら、ズーッと遠くで夜明けの合図の吹奏だ——なんて高らかに澄んだ音だろう。  
急ぐのだ! 軍の先頭に行け!——急げ! 君達の部署につけ、  
開拓者よ! おお、開拓者よ!)

偉大なる詩人は幾時代もの先を読む。彼の詩は科学の進歩、思想や審判の幾変遷にも堪え得るものである。時代、教派を越えた普遍性を持つことを要する。

A great poem is no finish to a man or woman but rather a beginning.<sup>33)</sup>

(偉大なる詩は、男、女のいずれにとっても、終結ではなく開始である。)

権威への寄り縋りとか安息など、到達点を暗示するようなものは、かかる詩人の拒否するところである。彼の同行の士は、庇護された肥沃の地や、安易の生活に導かれることは決してない。休みなき天体の運行、その旋回する軌道こそが、彼等の恐れなき前進のための教示である。最早片時の平安も許されないのである。勇気と健康に恵まれた者のみが、この試練に立ち向うのである。

Song of Myself においても、詩人の心眼は、至遠の星のまたたきを、そして広大無辺の宇宙の理法を観る。無限時間の彼方、果てなき果てなる彼処に、完成された姿をもって出現する「私」を待つ「主」(the Lord), 裏切りなき愛を抱く偉大なる「同志」(the great Camerado) との会合を約束された前進である。<sup>34)</sup>

I hear you whispering there O stars of heaven,  
O suns—O grass of graves—O perpetual transfers and pro-  
motions,  
If you do not say any thing how can I say any thing?<sup>35)</sup>

(君達がそこで囁くのを聞く、おお、み空の星よ、  
おお、恒星達よ——おお、墓場の草よ——おお、移送と促進の不断の働きよ、  
君達が語らずして、私に何が語れよう?)

また、Song of the Open Road (大道の歌)の「大道」にしても、自由、容認、健全、友愛、そして不滅の諸特性と共に、星座の位置の近からんことは少しも望まない不断の前進精神の象徴として選ばれているのである。

Of the progress of the souls of men and women along the grand

roads of the universe, all other progress is the needed  
emblem and sustenance.

(宇宙の壮大な道筋に沿って前進する男女の靈魂については、他の一切の前進が  
その象徴となり、支持力となることを要する。)

## (2) 自然と靈魂

彼を生んだ時代にも似て、天体の南中と夜明けの景観を示したホイットマン！彼の取り上げる自然は、すべて人間の活動との有機的連関性の中に息衝いている。即ち、万象の生命の生命と考えられる「靈魂」の存在の確証である。

私の逞しい靈魂は、天体に凝集する星雲に包まれ、幾時代をへて重り合った地層の上に位置し、太古の植物群の栄養を受け、巨大な蜥蜴の口に運ばれ、一切の育みの中に生成した。万象の力が、その完成に着実に役立てられた。<sup>36)</sup> したがって、それは君の内に、大地と太陽に内在する「善」(the good)を所蔵するものである。<sup>37)</sup>

前の年から歿年にかけての作品、“Grand Is the Seen”(目に入るものの壮大さよ)、の中で、彼はかかる「靈魂」について触れている。印刷原稿で加えられた第6行(括弧書き)と共に8行の詩である。

Grand is the seen, the light, to me — grand are the sky and  
stars,

Grand is the earth, and grand are lasting time and space,  
And grand their laws, so multiform, puzzling, evolutionary ;  
But grander far the unseen soul of me, comprehending, endow-  
ing all those,

Lighting the light, the sky and stars, delving the earth, sailing  
the sea,

(What were all those, indeed, without thee, unseen soul? of  
what amount without thee?)

More evolutionary, vast, puzzling, O my soul!

More multiform far — more lasting thou than they.<sup>38)</sup>

(目に入るものの、陽光の、私にとっての壮大さよ——天空、そして、星晨の壮大なることよ、  
大地の壮大なることよ、そしてまた、永続する時間と空間の壮大なることよ、  
そして彼等の法則の壮大なることよ、かくも多様で、目眩き、進化するものよ；  
だが、目に見えぬ私の靈魂は、それらのすべてを包含し、それらに特質を付与しながら、  
遙かに壮大なのだ、

光に、空に、星に、光をあて、大地を掘り、海を進み、

(これらのすべては、実際、お前という目に見えない靈魂がなければ何であろう？お前なしでは  
何程の分量のものであろう。)

より進歩的で、広大で、目眩きものよ、おお、私の靈魂よ！

彼等よりも遙かに多様で——遙かに永続的な、お前よ。)

「我の在り方」(what I am)を示すもの、個人の「人格」(personality)を与えるものが「我が靈魂」(my soul)であり、ホイットマンはこれを宇宙の中心とみる。「靈魂」に随って「永遠性」に向い、自己の分身を供給していく人間達、そこには推測を越えた愛と完成の喜びのみが存在するのである。

## (3) 自然と生死

Eidólons (幻霊)の詩は、shape の一語を3回繰り返しつつ、形成作用を続ける大地の幻霊 (eidólon)を賛美する。

Of orbic tendencies to shape and shape and shape,

The mighty earth-eidólon.<sup>39)</sup>

この幻霊 (eidólon) の語は、ギリシアの哲学者、デモクリトス (Democritus) より借用せるものであるが、意味はブルーノ (Giordano Bruno, 1548-1600) やライプニッツ (Gottfried Wilhelm von Leibnitz, 1646-1716) の「単子」(monad)に通ずるものである。すなわち、ヘーゲル (George Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831) の哲学流に、生と死の相互作用の中にその成長が期待されるものである。<sup>40)</sup>

この詩の中の一行, Ever the growth, the rounding of the circle, (1. 10), はエマーソン (Ralph Waldo Emerson) の “Circle” (円環論) を思わせる。

生命のうちでも永遠の生命である eidólon は、この詩の第15節で2回繰り返され、第17節では3回繰り返されて現在から無限の未来へと進み、次の第18節では God and eidólon として、神と並ぶ存在であることが示される。

Sweeping the present to the infinite future,  
Eidólons, eidólons, eidólons.

(§ 17, ll. 67, 68)

(現在を無限の未来へと運び去るもの、  
幻霊よ、幻霊よ、幻霊よ。)

最近目にした、迦葉仏、賢劫第三尊の次の偈に基だこの詩と同趣のものを感じた。

「一切衆生の性清淨なり、本従り無生なれば滅すべき無し、即ち此の身心是幻しの生なり、幻化の中罪福なし。」

死なき死、生なき生より不滅の永遠性を憶う寂滅為業の所以であろう。

子供が何かと問いかける「草の葉」の意味、その発芽の現象一つをとっても、死は究極的存在ではないことを示すのである。屍 (corpse) は良き肥料となっても不快なものではない。また時間の瞬間性と永遠性の意味も討究されなければならない。

この自然詩人が、自らの詩境を開く鍵となった “death” (死) の一語に開眼したのは、実に月下の灰色の渚であった。千度も繰り返して訴えられる物真似鳥の悲歌、そしてそれに伴う波の音のささやきを彼の心が捉えた時であった。

That he sang to me in the moonlight on Paumanok's gray beach,  
Witn the thousand responsive songs at random,  
My own songs awaked from that hour,  
And with them the key, the word up from the waves,

(Out of the Cradle Endlessly Rocking, ll. 176-9)

「死」は真理を開く鍵である。

× × × × × ×

## VI. 自然と宗教

ホイットマンの宗教観は、幼少のころ、クエーカー派の牧師でユニテリアン思想をもっていたエライアス・ヒックス (Elias Hicks) から説き聞かされた「内的衝動」(Inner Impulse)——「内なる光」をとおして得た宗教的感銘に始まる。しかし、彼が持論として説く宗教は、いわば自然崇拜、人間崇拜を根拠とした、万有神の信仰に類するものと考えられる。

諸物にひそむ神を見出し、また、自己をその諸物に浸透させようとするホイットマンの生き方は、「笈の小文」の「造化に随ひ、造化に帰れ」の精神である。また、目撃者として、知覚者として、融通無碍の特質を具えたウパニシャッド (Upanishad) の教えに共通している。即ち、不死性、神性、事物の実在性と完全性、靈魂のもつ自由性、万象に見出される絶妙の美しさ等に関して、消極的な防禦体制ではなくて積極的な称揚の立場をとる。そして、彼の場合、いかに各個人の主体性と人間同志の愛が強調されていることである。だから、既成の哲学・宗教の体系にしても、講義室の中ではなくて、広がりゆく雲の下で、地上の風物

に交り、流れゆく河に沿って立証されうるものでなければ、再検討を要するのである。彼のような自然人にとっては、論理や説教よりも、夜の湿気 (damp) や星の光の方がずっと説得力をもつのである。<sup>41)</sup>

A new order shall arise and they shall be the priests of man, and every man shall be his own priest.<sup>42)</sup>

(新しい秩序が生まれ、彼等は人類の牧師となり、また、各人は、それぞれ自らの牧師となるであろう。)

この文中の“they”は、最も偉大なる詩人 (the greatest poet) の衣鉢を継ぐ宇宙の子達 (the gangs of kosomos) である。彼等は自分を宇宙の秩序の体現者たるべく高めてゆき、一団の予言者 (prophets en masse) として、遠き未来を洞察することができる者とならなければならない。

### (1) 愛と民主主義

Blow again trumpeter! and for thy theme,  
Take now the enclosing theme of all, the solvent and the setting,  
Love, that is pulse of all, the sustenance and pang,  
The heart of man and woman all for love,  
No other theme but love — knitting, enclosing, all-diffusing love.<sup>43)</sup>

(再び吹き鳴らすのだ、喇叭手よ！そこで、お前の主題としては、

そうだ、すべてを包括するような主題を、溶媒となり、背景ともなるものを取り上げるのだ。

愛こそがそれだ。万物の脈搏であり、支えとなり、うずきであるものだ。

みんな愛を求めている。男の心も、女の心も。

愛以外に、どんな主題があるというのだ——編み合わせ、包み入れ、すべてに浸透していく

愛なのだ。)

これは、前にふれた詩、The Mystic Trumpeter の第5節の初めの5行である。物質界にひそむ精神的機構を探り出す意欲、そして、一切の此の世の経験は「愛」に帰って行くのだという悟りこそは、この「草の葉」の詩人が常に説き明かそうとする対象である。

天国のように爽快な夜の郊外、彼はそこでの散歩を楽しみつつ、「愛」の本質を見つけ出す。

愛は愛し合う者達にとっての大地であり、時間と空間を作り出すものである。日、月、星晨であり、真紅にして壮麗、溢るる香気を放つものである。

愛の祝福のあるところ、普遍的な人間は、普遍的な神に賛歌を捧げ、既述の“all joy!”が3度、4度と躍動する、英知と健康の喜びの世界が訪れる。

カラムス篇の竜骨的な主題である adhesiveness (男性的粘着力) は、民主主義の国家において、社会の構成要素として欠くべからざるものである。この男性的粘着力によって、人は見知らぬ者同志の間でも親愛の気を通わせ、再会を望むようになる。また、行きづりに見る他人の目の動きにも、そこに語られる言葉を汲み取り、彼と自己の一如たることを悟る。

この粘着力は、Song of Myself の次の2行にも示されている。J. パロウズ (John Burroughs) の指摘する altru-egoism (愛他的利己主義) に支えられる友愛である。

And what I assume you shall assume,  
For every atom belonging to me as good belongs to you.<sup>44)</sup>

(そして、私が取り上げるものは、君も取り上げる。

私に所属する原子のすべては、同じように君に所属するのだから。)

アジアやヨーロッパで長く存続する、執拗な権威を離脱し、自らへの誇りと、自由の精神のうちに新しく形成される新大陸、アメリカは、旧世界の学問や経験の蓄積のうちにのみ安住はしていない。そこに必要とされる、基礎となり、勇気づけとなるものは、民主主義の精神からもたらされる。あらゆる評価の尺度にしても、民主主義の形式を各々の部門に適用することから考え出される。この民主主義の形式は、自然の中に見られる形式と同様に、その結果が満足すべきものであることは、十分保証できるのである。また、この形式は、一度確立されるならば、後はおのずからの円滑な運びが期せられるものである。

自然の多年にわたる直接の影響力が、その英雄的な覇気が、大平原や山々の力強い空気が、塩からい海<sup>ブルー</sup>の

波頭が、一切の能力の、勇気の、情愛の、誇りの、刺戟物 (impetus) となり防腐剤 (antiseptics)<sup>45)</sup> となる。

## (2) 宇宙的調和・団結

個人の我 (ego) は全体の我 (total ego) に合致し、宇宙的調和を指向する。したがって、宇宙的調和・団結を説くことは、言わば自己の自然観の最終的位置づけを行なうことになる。「草の葉」では、Chanting the Square Deific (神聖なる方陣を歌う) の詩が、かかる自然観の解明者としての役割を果たしているように思われる。

この方陣をつくる四者は、いわゆる三位一体 (trinity) をなす「父」(Father)、「子」(Son) と「聖霊」(Holy Ghost) に対するものとして、自由の精神である「サタン」(Satan) を加えて完成される。したがって、「天帝」(the Godhead) の4つの面は、(1) 自然法にして父であるエホバ (Jehovah)、(2) 愛し、慰めを与える者としての子、キリスト (Christ)、(3) 全能者に対向する個々の意志に内存する神性、すなわち、自由の精神を表象するサタン (Satan) と、さらに、(4) 一切の事物に生命と独自性 (identity) を与える総体的なる霊魂である聖霊 (Santa Spirita)<sup>46)</sup> なのである。

この Chanting the Square Deific の詩は、Whispers of Heavenly Death 篇にあるが、この詩の7行目には、つぎに挙げるように、「父」は大地となっている。また、ホイットマンの説く「聖霊」は、キリスト教義におけるそれと同一のものではない。

As the Earth, the Father, the brown old Kronos, with laws,

(大地としての、「父」、日焼けした、古き神、クロノスよ、諸法則を伴いて、)

「草の葉」の詩の中では、“perfume” (香気) の語がしばしば人格、靈魂の自己表現や浸透作用を示すべく用いられている。つぎの詩行における“perfume”も、聖霊と交流し、宇宙の調和を完成すべく位置づけられた「靈魂」のものにはかならない。

Beyond Paradise, perfumed solely with mine own perfume,

Including all life on earth, touching, including God, including

Saviour and Satan,<sup>47)</sup>

(天国の彼方に、私の香気だけを匂わせて、

地上の生物のすべてを含め、神に触れ、神を含め、

また、救世主も悪魔<sup>アザン</sup>も含めながら、)

ホイットマンの活動的で積極的、しかも創造的な宇宙観にあっては、完全、不完全の別はなく、老若もなく、天国、地獄の区分も無用である。日常に見聞する一切の事物が神性を具え、靈魂と同様に肉体、物質も尊厳なのであり、天空と同様に大地も高貴な存在以外の何物でもない。

「草の葉」に語られる天然の諸現象、そこに躍動する無数のアダムとイヴ達、そして文明の激しい胎動、永遠に新しい民主主義的精神の巨歩は、すべて結論し難い逞しい生気を持つ。それらは、不断に新鮮な暗示を与えてくれる。「草の葉」の自然の周辺に発散するこの香気 (perfume) を吸い込み、柔軟、強壯で、直観力に富む自主的な国民に、また、さらに健全な世界市民に成長することは、読者の能動的態度に一任されている。前進 (progression) の精神のみが、我々をして彼の背後に就かしめ、彼を先導せしめるのである。

## (注)

(1) Harold W. Blodgett and Sculley Bradley, *Leaves of Grass*, Comprehensive Reader's Edition, p. 251, Sea-Drift (藻汐草) 篇, Out of the Cradle Endlessly Rocking (絶えず動く揺籃から), ll. 135, 6.

(2) Floyd Stovall, *Walt Whitman*, p. 464.

The poem expresses Whitman's dream of creating a new poetry that shall fuse the art of man with the art of nature.

なお、これは Autumn Rivulets (秋の小川) 篇の詩。

(3) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 151, Song of the Open Road (大道の歌), § 4, l. 49.

- (4) 拙著、苫小牧工業高等専門学校紀要第4号所載の、(‘Leaves of Grass’ にみられる「愛」の本質について)の(注)(50)を参照されたい。
- (5) この各行の出だしの語句の反復を調査すればきりがなくなるが、気のついたものを摘記する。

Song of Prudence (熟慮の歌)は56行の詩であるが、All〜 で始まる行が15ある。また、On the Beach at Night Alone (ただ一人夜の渚で)の14行の詩では、8行が All〜 で始まっている。

その他、See〜, Let〜, When〜, Where〜, Always〜, As〜, For〜, And〜, O〜, To〜, From〜, With〜, Land〜, I〜, My〜, We〜, You〜, Would you〜, This〜, The〜, A〜, 等々数多くの行頭の語句の重畳が散見する。

当然のことながら最も頻出度の高いのは、定冠詞 “The” の出だしである。Song of Myself の第15節、ll. 264-273 で10回、ll. 293-306 で14回の The〜 が行頭に見える。なお、この第15節は、ll. 264-329 の66行のうち、45行が The〜 で始まっている。例のカatalog的展開と裏腹である。その後には、人世の諸断片がパノラマのように、回転灯籠のように見えてくる。

Song of the Broad-Axe (大斧の歌)の第3節、第10節も The〜 の行頭が多い箇所である。ll. 25-41 の17回、ll. 216-233 の18回とかなりの連続頻度を見せている。第3節は ll. 25-93 の69行中、The〜 で始まっていない行は僅かに7行であり、第10節は、ll. 216-238 の23行中、僅かに1行である。

これらの The〜で始まる行のなかには、

“The soul,” (靈魂よ,) (Starting from Paumanok 「ボーマノックを出発して」), l. 69.

“The axe leaps!” (斧が躍る!), Song of the Broad Axe, l. 186.

“The shapes arise!” (諸々の形象が出現する!) do., ll. 200, 207, 216, 225, 233, 239.

のように、極く簡潔なフォームのもの、しかも “The shape arise!” のように、6回も諸所に顔を出して、しっかりと読者の脳裏に印象づけられる、強く効果的なものなどが注目される。

The shape of〜 (Song of the Broad-Axe, ll. 220-223, 226-231), The door〜 (do. ll. 235-238) のように、他の語句とコンビになった The〜 にも気が付く。

最高の連続頻度数の The〜 の見られるのは、Children of Adam (アダムの子ら) 篇の Spontaneous Me (自発的な我) であろうか。ll. 17-43 の27行が The〜 で始まっているのである。この全体で45行の詩、Spontaneous Me, のうち、35行が The〜 の行頭である。

代名詞を用いた、You〜, I〜 の行頭も多く、特に I〜 は、Calamus (カラムス) 篇の Salut Au Monde! (世界万歳!) の第5, 6, 7, 8, (9は欠落、ただし ll. 130-137 を第9節とする版もある。), 10の各節で ll. 79-162 の84行中、7行を除けば全部 I〜 で始まっており、34回続いているところもある。しかも I see〜 の形が圧倒的に多い。

また、Uncollected Poems (未収集の詩) の中の Sights—The Army Corps, Encamped on the War Field (戦場に野営する軍団の光景) のように、12行の詩の全行が The〜 で始まっているものがある。The ambulances—(救急車——) の1行が末尾の行となっている。

偉観なのは間投詞で始まる O〜 の連続である。Poems Excluded From Leaves of Grass と、残念ながら「草の葉」から除外された詩群の一つであるが、Apostroph (アポストロフィ) は、その65行の詩が第15, 43, 59, 60 の4行を除いて全部 O〜 で始まり、文中の O を加えると、102の O を数えることができる。実に自然詩人、ホイットマンの面目躍如で、この O を勘定していると野中のタンポポの群花を観る思いになる。l. 44 など “O” が4つも飛び出してくる。

O creation! O to-day! O laws! O unmitigated adoration!

(おお、創造よ! おお、今日の日よ! おお、法則よ! おお、鎮まることなき賛嘆の念よ!)

と言った調子である。

更に煩瑣をいわず顕著な一例を加えると、同じ Poems Excluded from Leaves of Grass の Respondez! の詩は、68行のうち、8行を除いて全部が Let〜 で始まり、前述の Apostroph の詩の O〜 の例と盛況を同じくしている。

過度の詮索は控えることにして、あと若干の例を挙げるにとどめる。

I announce〜 が行頭に続く例として、Songs of Parting (別れの歌) 篇の So Long! (さらば!) の詩がある。ll. 15-22 の8行、24-29の6行と続き、途中の1行(第23行)(それも I say〜 となっている。)を除くが、14行に連続して I announce〜 が見られる。

同篇の詩、Thought (思い)、の第2節は、ll. 20, 33 の2行を除いて、ll. 16-33 の18行のうち16行全部が Of〜 の行頭で始まっている。

最後に再び Song of Myself に戻って、教訓的な In vain〜 と、例示する趣きをもった行が、第31節の ll. 674-682 に7回連続する等々である。

- (6) 単一語の繰り返し例は少ないが、その場合には、感嘆符をつけて変化をもたせ、当然のことながら強い表現となっている。もっとも、一行の中に同一語句が3度繰り返される例自体がそう多くはないのである。

特殊のものとして、Out of the Cradle Endlessly Rocking の詩では、mocking-bird (物真似鳥) の歌の中に、鳥の囀りを思わせる3度の単語の繰り返し頻出する。はじめは Shine! shine! shine! (太陽に) (l. 32) と一番いの鳥が、揃いの喜びを表出する。ついで、連れを失った雄鳥が繰り返す、Blow! blow! blow! (風に) (l. 52), Soothe! soothe! soothe! (波に) (l. 71), Loud! loud! loud! (亡き鷗鳥に) (l. 81), Land! land! land! (陸地への呼びかけ) (l. 90) が、前とは打って変って切切たる哀調を帯びて訴え、極めて効果的である。また、And again death, death, death, death, (l. 169), Death, death, death, death, death. (l. 173) と論ずようにささやく波は、醇醇と4度、5度とdeath (死) を繰り返す。

その外、Autumn Rivulets 篇の To Think of Time (時間を思う) の詩の第71行に、つぎのように yourself が3回繰り返されている。

Yourself! yourself! yourself! for ever and ever!

(いつ迄も、いつ迄も、君自身を! 君自身を! 君自身を!)

- (7) Whispers of Heavenly Death (天国の死の囁き) 篇の詩。

ついでながら、Democratic Vistas (民主主義展望) の中にも、For history is long, long, long. (l. 1858, 下線は筆者) の一行がある。

- (8) Autumn Rivulets 篇の詩。

- (9) Songs of Parting 篇の詩。

- (10) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 446, Whispers of Heavenly Death 篇の詩。

- (11) Ibid., pp. 256, 7.

- (12) Birds of Passage (渡り鳥) 篇の詩。

- (13) From Noon to Starry Night (真昼から星の輝く夜へ) 篇の詩。

- (14) Hymns to the universal God from universal man — all joy!

A reborn race appears — a perfect world, all joy!

Women and men in wisdom innocence and health — all joy!

(下線は筆者)

(普遍の「神」に普遍の人間から賛美歌が捧げられる——溢れる喜び!)

再生の民族が出現し——完成を見た世界、溢れる喜び!

女性も男性も賢明で、無垢で、健康である——溢れる喜び!)

- (15) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 471, 末尾の4行である。

- (16) Ibid., p. 309, l. 19.

- (17) Song of Myself, § 1, l. 6.

- (18) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 49, Song of Myself, § 21, ll. 438-445.

- (19) do., § 22, ll. 448-453.

- (20) Floyd Stovall, *Walt Whitman, Prose Works 1892*, volume II, *Collect and Other Prose*, p. 416, ll. 1692-1700.

A fitly born and bred race, growing up in right conditions of out-door as much as in-door harmony, activity and development, would probably, from and in those conditions, find it enough merely *to live*—and would, in their relations to the sky, air, water, trees, &c., and to the countless common shows, and in the fact of life itself, discover and achieve happiness—with Being suffused night and day by wholesome extasy, surpassing all the pleasures that wealth, amusement, and even gratified intellect, erudition, or the sense of art, can give.

- (21) Floyd Stovall, *Walt Whitman*, p. 320.

The passionate tenacity of hunters, woodmen, early risers, cultivators of gardens and orchards and fields, the love of healthy women for the manly form, seafaring persons, drivers of horses, the passion for light and the open air, all is an old varied sign of the unfailing perception of

- beauty and of a residence of the poetic in outdoor people.
- (22) Song of Myself, § 48, l. 1276.
- (23) Blodgett and Bradley, op. cit., pp. 251, 2, ll. 145, 149.
- (24) 明治文学全集, 40, (筑摩書房刊), pp. 35, 6, 明治31年6月5日「太陽」より。
- (25) Stovall, Walt Whitman, pp. 459, 460.
- .....Whitman held the instinct of sex to be the creative and progressive force in man and nature, both physical and spiritual.
- (26) Children of Adam 篇, To the Garden the World (世界の楽園へ)
- (27) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 109, l. 4.
- (28) Ibid., p. 401.
- Autumn Rivulets 篇, With All Thy Gifts (あなたの贈り物を全部持って)
- (29) Ibid., p. 750, ll. 98 n - 101 n.
- Not but what the brawn of *Leaves of Grass* is, I think, thoroughly spiritualized everywhere, for final estimate, but, from the very subjects, the direct effect is a sense of the Life, as it should be, of flesh and blood, and physical urge, and animalism.
- (30) Ibid., p. 518, ll. 20-23.
- Sands at Seventy 篇の詩。この詩と Chanting the Square Deific (神聖なる方陣を歌う) の中の Jehovah, Satan との関連性については, Stovall の指摘がある。(Walt Whitman, p. 467, 8)
- (31) Ibid., p. 556.
- Good-Bye My Fancy (我が空想よ, さらば) 篇の詩。
- (32) Ibid., p. 232, ll. 101-4.
- Birds of Passage (渡り鳥) 篇の詩。
- (33) Ibid., p. 727.
- Preface 1855 — *Leaves of Grass, First Edition*, ll. 601-7.
- (34) 歌仙を三十六歩に喩へ, 「一步も帰る心なく, 行にしたがひ, 心の改はたゞ先へ行心なれば也」と言った芭蕉の心境に通うものと思われる。
- 現代随想全集, 10, 寺田寅彦・中谷宇吉郎集, (創元社刊), p. 222.
- (35) Ibid., p. 87.
- Song of Myself, § 49, ll. 1299-1301.
- (36) Ibid., p. 81.
- do., § 44, ll. 1162-9.
- (37) Ibid., p. 30.
- do., § 2, l. 34.
- You shall possess the good of the earth and sun, (there are millions of suns left,)
- (38) Ibid., pp. 556, 7.
- Good-Bye My Fancy 篇の詩。
- (39) Ibid., p. 7, ll. 47, 8.
- Inscriptions (銘詩) 篇の詩。
- (40) Stovall, op. cit., p. 467.
- (41) Song of Myself, § 30, ll. 653, 4.
- By the Roadside 篇, When I Heard the Learn'd Astronomer (博学なる天文学者の話を聞いて), ll. 7, 8.
- (42) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 727.
- Preface 1855 — *Leaves of Grass, First Edition*, ll. 623, 4.
- (43) Ibid., p. 469, ll. 30-4.
- (44) Ibid., p. 28, § 1, ll. 2, 3.
- (45) Ibid., p. 749, ll. 90 n, 91 n.
- Preface 1876 — *Leaves of Grass and Two Rivulets*.
- (46) Stovall, op. cit., p. 463.
- (47) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 445, ll. 39, 40.